

『太平經鈔』丙部卷之三（涵七四六 太平部 外上、一七葉表六行目〜一八葉裏三行目）

二〇一九年三月二三日（土）

於 京都大学「道教思想研究会」

担当 桐原 孝見

【原文】

集衆行事、愈者以爲經書、則所治無不解訣者也。

吾道即甲子乙丑、六甲相承受、五行轉相從、四時周反始。書卷雖衆多、各有各可紀、比若人一身、頭足轉相使。一字只（↓校正の「適」を採用する）遺一字起、賢之次之以相輔、合陰陽以言語、表裏相應如規矩。始誦無味有久久、念之不懈驗至矣。（↓「始誦無味、有久久念之、不懈驗至矣。」とすることも考える。）灾害去身神還聚、人自謹良無惡子。爲無刑罰、而道化美極也。明按吾文以却咎、扞禍、禍自止、民自壽、原未得本、無終始。十相應、太陽文也。十九相應、太陰文也。十八相應、中和書也。十七相應、破亂文也。十六相應、過中書也。十五相應、無知書也、可言半吉半凶文。十四中者、邪文也。十三中者、大亂文也。十二中者、棄文也。十一中者、佚中文也。十七中者已下、不可用、誤人文也。隨傷多少、還爲人傷、久久用之不止、法絶後滅嗣。此爲十十文也。

【校正】

『太平經』卷五〇 灸刺訣第七四

◇則所治無不解訣者也：經作「則所治無不解訣者矣」

『太平經』卷五〇 諸樂古文是非訣第七七

◇一字只遺一字起：經作「一字適遺一字起」

◇賢之次之以相輔：經作「賢者次之以相補」

◇合陰陽以言語：經作「合其陰陽以言語」

◇念之不懈驗至矣：經作「念之不懈驗至矣」

◇為無刑罰：經作「名之爲無刑罰」

◇而道化美極也：經作「道化美極也」

◇扞禍禍自止民自壽：經作「姦禍自止民自壽」

◇中和書也：經作「中和文也」

◇過中書也：經作「遇中書也」

◇佚中文也：經作「迭中文也」

◇十七中者已下：經作「十中者以下」

◇法絶後滅嗣：經作「法絶後滅門」

◇此爲十十文也：經作「此十十文也」

【書き下し】

衆くの行事を集め、愈ゆる者以て經書と爲し、則ち治むる所解決せざる者無きなり。

吾が道即ち甲子乙丑、六甲相い承受し、五行轉りて相い従い、四時周りて反始す。書卷衆多と雖も、各各紀す可き有り、比えば人の一身、頭足轉りて相い使うが若し。一字適遺すも一字起こり、賢の之れに次いで以て相い輔け、陰陽を合するに言語

を以てすれば、表裏相い應じて規矩の如し。始め味わい無きを誦うこと久。久に有るも、之れを念じて懈らざれば驗至る。災害身を去り神還りて聚まれば（「災害去り身神還り聚まれば」とすることも考える）、人自ら謹良にして惡子無し。刑罰無く、而して道化の美極と爲すなり。明らかに吾が文を按じて以て咎を却け、禍を扞ぎ、禍自ら止めば、民自ら壽く、未を原ね本を得て、終始無し。

十に十相い應じるは、太陽の文なり。十に九相い應じるは、太陰の文なり。十に八相い應じるは、中和の書なり。十に七相い應じるは、破亂の文なり。十に六相い應じるは、過中の書なり。十に五相い應じるは、無知の書なり、半吉半凶の文と言ふ可きなり。十に四中たる者は、邪文なり。十に三中たる者は、大亂の文なり。十に二中たる者は、棄文なり。十に一中たる者は、佚中の文なり。十に七中たる者已下、用う可からず、人を誤る文なり。傷の多少に隨い、還りて人傷を爲し、久久として之れを用いて止めざれば、法として後を絶え嗣を滅す。此れ十の文爲り。

### 【現代語訳】

全て集めてきて、回復したものを経典とすれば、治療して解決されないものはない。

我が道は物事の根本で、六甲が引き継がれ、五行が変化して互いに行き来し、四季が移って立ち戻るようである。書籍は数多いが、それぞれ書き記されるものがあり、たとえば人の身体が、頭部と脚部とで動き働くようなものである。一字がたまたま忘れられても一字があるし、賢者が整理して助け、陰陽が言葉と合致すれば、表裏が互いに関連して規則のようである。当初は味が無いことを長時間誦えて、怠けずに願えば効果が現れる。災難が身体から無くなり神霊が戻って集まると、人々は自然に善良で愚かな者がいない。刑罰が無く、道の教化が最も美しい状態なのである。確かなのは我が文章を考えたと災いがなくなり、禍事が防がれ、自然に終息すれば、民の寿命がのびるから、末節を究明して根幹を手にしようとしても、手に入れない。十に十が適合するものは、太陽の文である。十に九が適合するものは、太陰の文である。十に八が適合するものは、中和の書である。十に七が適合するものは、ごたごたとした文である。十に六が適合するものは、どこかかたよった書である。十に五が適合するものは、無知の書であり、吉凶が相半ばする文とも言うことができる。十に四が適合するものは、邪悪な文である。十に三が適合するものは、大いに秩序を乱す文である。十に二が適合するものは、捨てて顧みない文である。十に一が適合するものは、失われた文である。十に七が適合するもの以下は、使うことが出来ないし、人を迷わせる文である。傷が多いか少ないかで、逆に人が傷つけられ、長時間にわたり使用をやめなければ、法として継承されないのである。これらが十が適合する文である。

【原文】

樂得其實者、但觀上古之聖辭、中古之聖辭、下古之聖辭、合其語言、視其所爲、可知矣。復思上古道書、中古道書、下古道書、三合以同類相招呼、復令可知矣。凡書文皆天談、何故其治時矣（↓校正の「何故其治、時亂時不平」を採用）。然。能其言（↓校正の「能正其言」を採用）、正其言者（↓校正の「明其書者」を採用）、理矣。不正不明、亂矣。正言詳辭、必致善也。言凶辭、必致怨矣。欲致善、但正本、本正則應天文、與聖辭相得、再轉應天理（↓校正の「再轉應地理」を採用。上文と下文の「天文」「人文」との関係を考慮する。）、三轉爲人文、四轉爲萬物、萬物則生浮華、則亂敗矣（↓校正の「浮華則亂敗矣」を採用）。天文將出（↓校正の「天文聖書時出」を採用）、以考元正始、除其過者置其實、明理凡書、即天之道也。得其正言者、與天意相應。邪也。（↓『合校』では後文に繋げる）

【校正】

- 『太平經』卷五一 校文邪正法第七八
- ◇樂得其實者：經作「子欲樂得其實者」
- ◇但觀上古之聖辭：經作「但觀視上古之聖辭」
- ◇復思上古道書：經作「復視上古道書」
- ◇凡書文、皆天談：經作「今凡書文、盡为天談」
- ◇何故其治時矣：經作「何故其治、時亂時不平」
- ◇能其言：經作「能正其言」
- ◇正其言者、理矣：經作「明其書者、理矣」
- ◇正言詳辭、必致善也：經作「正言詳辭、必致善」
- ◇言凶辭、必致怨矣：經作「邪言凶辭、必致惡」
- ◇欲致善、但正本：經作「欲致善者、但正其本」
- ◇再轉應天理：經作「再轉應地理」
- ◇則亂敗矣：經作「浮華則亂敗矣」
- ◇天文將出：經作「天文聖書時出」
- ◇與天意相應：經作「與天心意相應」

【書き下し】

其の實を得るを樂う者、但だ上古の聖辭、中古の聖辭、下古の聖辭を觀て、其の語言を合し、其の爲す所を視て、知る可きなり。復た上古の道書、中古の道書、下古の道書を思い、三合して同類を以て相い招呼すれば、復た知る可からしむなり。凡そ書文は皆天談、何が故に其れ治時ならん（↓校正に従えば「何が故に其れ治まるも、時に亂れ時に平ならざらん」）。然り。其の言を能くし（↓校正に従えば「能く其の言を正しくし」）、其の言を正しくする者は（↓校正に従えば「其の書に明るき者は」）、理まるなり。不正不明なれば、亂れるなり。正言詳辭なれば、必ず善を致すなり。言凶辭なれば、必ず怨を致すなり。善を致さんと欲せば、但だ本を正し、本正しかれば則ち天文に應じ、聖辭と相い得い、再轉して天理に應じ（↓校正に従えば「再轉して地理に應じ」）、三轉して人文を爲し、四轉して萬物を爲す、萬物は則ち浮華を生じ、則ち亂敗するなり。天文將に

出でんとして、以て元を考え始を正し、其の過を除く者、其の實を置き、明らかに凡書を理め、即ち天の道なり。其の正言を得る者、天意と相い應ず。邪也。

#### 【現代語訳】

真実を手に入れようと望む者は、上古の聖人の言葉や、中古の聖人の言葉や、下古の聖人の言葉を見極め、その言葉づかいを集めて、言動の結果を確認し、会得することができ。また上古時代の道書、中古時代の道書、下古時代の道書を調べ、三つを照らし合わせて同じ種類のもを集めれば、さらに会得することができるのである。書や文というものは、すべて天の言葉である、どうして統治が安定しているのだろうか（↓どうして国家が統治されていても、乱れたり平和でなかったりするのだろうか）。その通りだ。言葉にたくみで（↓校正に従えば「その言葉を正しくし」）、その言葉が正しければ（↓校正に従えば「書に明らかであれば」）、平和である。正しくなく明らかでなければ、混乱するのである。正しい言葉で詳細に述べれば、必ず良い結果になるのである。言葉が悪ければ、必ず悪い結果になるのである。良い結果にしたいならば、根本を正しくする、根本が正しければ、天文に合致し、聖人の言葉に当てはまり、再び変わると天理（↓地理）に合致し、三度変わると聖人の文章となり、四度変わると万物になるのである、万物は浮華を生じさせ、損なわれる（↓校正に従えば「浮華は混乱敗亡するのである」）。天文聖書が現れ出るさいには、おおもとなるものを考え、不要なものをのぞき、書を整えて明らかに示すことが、天の道なのである。正しい言葉を得るものは、天の意志と適合する。邪也。

#### \* 二 解説

『太平經』卷五三 分別四治法第七九

真人純稽首戰慄、「吾今欲有所復問、非道事也。見明師言、事無不**解説**者、故乃敢冒慚復前、有可問疑一事、何等。」

\* 三 甲子乙丑

『太平經』卷一一九 三者為一家陽火數五訣第二二二

**甲子**、天正也、日以冬至、初還反本。**乙丑**、地正也、物以布根。丙寅、人正也、平旦人以初起、開門就職。此三者、俱天地人初生之始、物之根本也。

\* 四 六甲

『資治通鑑』卷一七六、陳紀一〇 長城公至德二年（五八四）

【胡三省注】古者、八歲入小學、學六甲・五方・書計之事。**六甲**、謂六十甲子也。

\* 五 無味

『老子』三五章

道之出口、淡乎其**無味**。視之不足見、聽之不足聞。用之不足既。道の口に出だすは、淡乎として其れ味わい無し。之れを視て見るに足らず、之れを聽いて

聞くに足らず。之れを用うれば既くすに足らず。

\* 太陽・太陰・中和

『太平經鈔』卷二 名為神訣書

太陰・太陽・中和 三氣共為理、更相感動、人為樞機、故當深知之。